

滋賀の文化情報誌
デュエット

Duet

2020 秋 vol.136

特集

琵琶湖博物館 第3期リニューアル!

新撰、淡海木間撰 81

柴

INFORMATION STATION 催し案内 2020 秋

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内



フォトスポット
Photo Spot

特集

琵琶湖博物館 第3期リニューアル!



B展示室「森にくらす」(次ページ平面図のB)。獣を狩り、どんぐりを採集する縄文人

滋賀県立琵琶湖博物館が第3期リニューアルを終え、10月10日(土)、グランドオープンを迎えました。当初7月だった予定が新型コロナウイルスの影響で延期されましたが、2階にあるA展示室とB展示室が装い新たとなり、6年越しのリニューアル計画が完了しました。

担当学芸員の里口保文さん、渡部圭一さん、そして高橋啓一館長に、新たな展示についてお聞きしました。

■滋賀県立琵琶湖博物館

住 所 草津市下物町1091

連絡先 TEL 077 (568) 4811 FAX 077 (568) 4850

10月10日より琵琶湖博物館は入館が事前予約制になります。博物館HPより予約してください。開館情報等は変更する可能性があります。最新情報をHPでご確認ください。

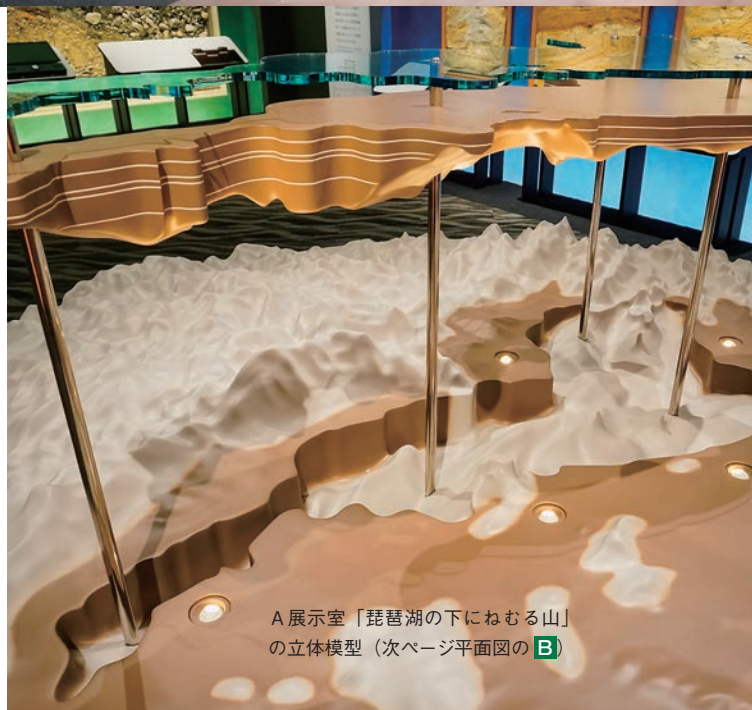
観 覧 料 常設展示：大人800円、高・大学生450円、小・中学生 無料
※企画展示をご覧になるには別途料金が必要です。

アクセス JR琵琶湖線「草津駅」西口から近江鉄道バス「びわこ博物館」行きで「びわこ博物館」下車／名神「栗東IC」から車で約30分、名神「瀬田西IC」または新名神「草津田上IC」から車で約35分

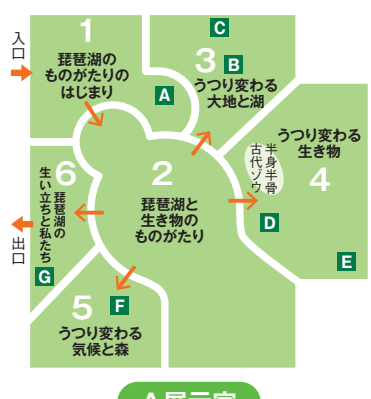
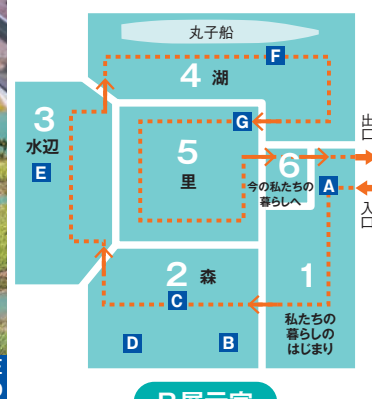
取材／編集部 写真／辻村耕司



滋賀県立
琵琶湖博物館

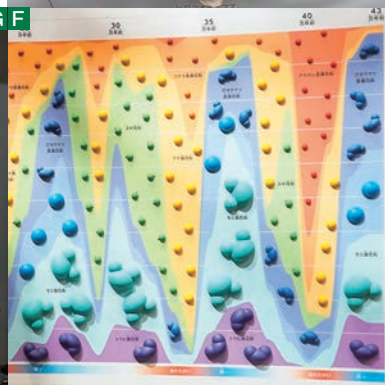


A展示室「琵琶湖の下にねむる山」の立体模型(次ページ平面図のB)



- ### B展示室
- 下の写真から時計回り順に
- A 人間にとっての自然をシンボライズした「近江に棲む龍」
 - C 磨製石斧で木を切るポーズがとれるフォトスポット
 - D 山の木や石材の利用を紹介したジオラマ
 - E 内湖に面した集落の暮らしを紹介したジオラマ
 - F タブレットを使って、琵琶湖上を進む丸子船の姿を見ることが出来る
 - G 集落の入口に掛けられた勸請縄

- ### A展示室
- 上の写真から時計回り順に
- A 琵琶湖上からの360°パノラマ写真と岩石
 - C 琵琶湖の歴史を伝える地層
 - D 手でさわって体感できる立体レリーフは、他にも設置されている
 - E DNA解析による最新の系統樹
 - F 化石花粉によってわかる過去の気候
 - G 「琵琶湖と生き物の10大事件年表」の最後は、人間が登場して以降の歴史が記され、B展示室への導入になっている



A展示室リニューアルについて

一番伝えたいのは、琵琶湖の生い立ちだけではなく、周囲の大地や環境、生き物が長い時間をかけて、ものすごく大きく変化したということなんです。

滋賀県立琵琶湖博物館 学芸員 里口保文さん

「こちらの展示は、私が研究している火山灰層について、滋賀県と同じものが千葉県でも見つかるといったことを紹介しています。このコーナーは、他の博物館でやりたいと言ったら、おそらく反対されます」

琵琶湖の下には堆積した土砂が水よりもはるかに大量にあります。

入口から順に解説いただけますか。

里口 「琵琶湖の生い立ちを伝える」という博物館全体の中の位置付けは、新しいA展示室も変わらないのですが、以前よりは琵琶湖に関する話の割合が増えています。以前の展示では、「琵琶湖博物館に來たのに琵琶湖の話がなかなか出てこない」という意見が来館者からありました。

最初の①「琵琶湖のものがたりのはじめ」は琵琶湖の真ん中から琵琶湖の周りを見たパノラマ写真をご覧ください。こいうした風景の中にも、実は琵琶湖の生い立ちの情報が隠されているんです。

次の②「琵琶湖と生き物のものがたり」

では、まず大きな画面と床にある地図が連動して、その変化をたどっていきます。前言撤回のようになりますが、一番われわれが伝えたいのは、琵琶湖の生い立ちそのものだけではなく、琵琶湖をふくめた周囲の大地が長い時間をかけてものすごく大きく変化したということなんです。その大地の変化につれて、ゾウやワニのように現在の日本にはいない生き物がいたり、生物相も入れ替わっていきました。

展示室の真ん中に進んでいただくと、ガラス張りの下にゾウの足跡化石の発掘現場

が見えるようになっていきます。上を歩いても大丈夫です。この中央から、放射状に興味をお持ちのコーナーへ進んでいただければ、壁をほとんど取り去りました。

里口さんご担当の③「うつり変わる大地と湖」へ進みましょう。

里口 琵琶湖のように一つの場所に40万年もの間存在する湖は非常に珍しいんです。普通は土砂で埋められてすぐなくなってしまう。長く存在する理由は、一つ目に琵琶湖の西側にある断層帯がほとんど動いていないため、二つ目に琵琶湖の出口がせばまっていて水が出にくくなっているためということを解説しています。こちらには、高島市教育委員会が採取した湖西の饗庭野断



プロフィール

さとぐち・やすふみ／1970年、大阪府生まれ。1997年より滋賀県立琵琶湖博物館に勤務。専門は地質学。

層を含む地層の標本を展示しています。表面に接着剤を吹き付けて、ペリツとはがしたもので、当館に移管していただきました。その右側の壁面には、地層の標本を額縁に入れて、美術館風に展示してあります。

——おもしろいですね。抽象画のようにも見えます。

里口 正直なところ、地層の展示ってあまりおもしろくないんですよ(笑)。でも、琵琶湖の生い立ちを語る上で地層がものすごく大事なので、なんとか興味を持っただければと考えました。

——「琵琶湖の下にねむる山」と題された立体模型は見入っていますね。

里口 琵琶湖は、水がたまっている部分だけではないことを紹介したものです。上に浮いている青い板が水で琵琶湖の平均水深

数万年前の寒い時代は、夏でも涼しくて冬はとても寒いです。

——つづいて、4「うつり変わる生き物」のコーナーです。

里口 A展示室の目玉として紹介されるコーナーかと思っています。巨大なゾウは以前の展示にもありましたが、筋肉の付き方などを考えて、半身の皮膚を復元しています。その奥は古代の生き物を実物とレプリカで紹介しています。以前は鉱物や化石など、いろんな標本を見てもらっていたのを、動物化石だけに限定しました。ワニは足跡化

(約41m)ほどの厚さになっています。縦横比は5…に強調して。下の茶色が堆積した土砂で、水よりもはるかに大量です。その水と土砂を取り去ると、でこぼこした地形が出てきて、竹生島などの島は、山の一番高いところが水上に頭を出しているということを目に見え形にしています。

おもしろいのは、琵琶湖の水深は北湖が深く、南湖は浅いのですが、土砂のたまり方を見ると北湖は意外に浅くて、南湖がすごく深いんですね。また、西側には断層があるためにすごく分厚くなっていて、東の方はわりと浅いこともわかります。

——それに、湖が移動してきた三重県方向の山地が低いことも実感できますね。

里口 なかなかいい出来だなと満足しているんですが、つくるのは本当に大変でした。

石とともに大きく紹介しています。古い湖の時代なので、場所は現在の三重県ですが、その一角が以前はなかった最新研究にあたるコーナーですね。

里口 いまでは生き物のDNAの研究から、その種がいつごろ琵琶湖で固有化したのかなどがわかりますので、その系統樹が化石とともに展示されています。現在はDNAの研究を行う学芸員がいるので、「研究デスク」の形で、研究のようす自体も紹介する展示になっています。

実際にはDNAの研究だけで過去の状態を言うことはなかなか難しく、発見されている化石の年代や分化する要因となる当時の地形などを加味して、年代を決めているという側面もあります。

——なるほど。つづいては5「うつり変わる気候と森」。

里口 地層中の花粉化石によって気候と森の変化を再現したコーナーと、メタセコイアなどの植物化石によって気候と森の変化を紹介したコーナーの二つがあって、それぞれ雰囲気がいぶん違います。これは担当学芸員の個性が出ていますね。

スギ花粉を1万倍に拡大した模型が置かれています。こうした花粉が化石として地層に残っていて、それを調べることで、過去の森の姿、過去の気候がわかるんですね。寒冷だった時代を体験してもらうコーナーもあります。

気温の変化を示した折れ線グラフで、暖かい、寒い、暖かい、寒い期間が何回も繰り返されていることがわかりますが、暖かい時代というのは、それほど今と変わらないんですよ。ところが寒い時代は変化が激しくて、数万年前の寒い時代というのは夏でも涼しくて冬はとても寒いです。

——最後の6「琵琶湖の生い立ちと私たち」には、「琵琶湖と生き物の10大事件年表」というじっくり見たいコーナーがあります。

里口 最後のまとめとして、ここまでバラバラに紹介していた事柄を一つにまとめています。年表の終わりの方では、次のB展示室でご覧いただく人の歴史に関しても書かれていて、A展示室の時間スケールで見ると、ものすごく短いんだということがわかるかと思っています。最後に相谷熊原遺跡(東近江市)で出土した国内最古級の土偶を、レプリカで展示しています。

それから出口右手には、岩石や鉱物の標本も含めて、地域で化石や鉱物を掘って楽しみながら調べてきた方々から当館に寄贈していただいた標本の展示や、現在もその活動をしている方が自ら展示するコーナーがあります。ここは、皆さんにとっての交流の場にもなっていると思います。

B展示室リニューアルについて

モノを並べるだけではなく、ジオラマやイラストを用いて、どのように自然を利用していたかわかるように心がけました。

滋賀県立琵琶湖博物館 学芸員

渡部圭一さん

「以前の展示では、丸子船は中央に置かれていました。周りには小さい船などがあって、全体像をすっきりと見ることができなかったんですが、なるべく巨大さが伝わるように壁際に配置しています。壁に掲げているのは広重の浮世絵『近江八景』です」

森・水辺・湖・里というコーナー立てをしています。

——入口から順に解説をお願いします。

渡部 B展示室は縄文時代以降の人間と自然の関わりを扱っています。人間にとって自然はよい面と怖い面、二つの顔を持っているわけですが、そうした存在を人間はしばしば生き物の姿に形象化してきました。その代表が竜です。地震や雷を起こすといった怖い面を持ちつつ、雨をもたらす水の神様でもあるんですね。滋賀県は竜王信仰などがあり、^{あまご}雨乞いの祭礼も盛んだったところなので、自然のシンボルとして、入ってすぐに登場させています。

この後のパネルの解説でも、ところどころ

ろ竜（自然の側）からのコメント、突っ込みが入ります。昔は人間と自然がうまくやっていたみたいな、牧歌的な内容にはなっていないので、ときどき竜が毒舌を吐きます。

——粟津貝塚は以前の展示にもありましたが飛ばして、**2「森」ゾーンに進みます。**

渡部 ここからは滋賀の自然環境の多様性がわかるように、森・水辺・湖・里という4つのコーナー立てをしています。「森」の最初は縄文時代の穴太遺跡（^{あのおう}大津市）をもとにした展示で、広葉樹のドングリを利用して貯蔵穴に蓄えるなど森の恵みを利用

していました。実が採れる広葉樹は切らず、針葉樹を磨製石斧で切っていました。

時代が進んで、中世には山の境界をめぐって争いなども起こるようになります。次は大津市北比良で、大正時代生まれの男性から話を聞いたり、古文書などをもとに、比良山麓の村でどんな森林の使い方があったかを示したものです。いまは木が鬱蒼と茂っていますが、戦前ぐらいだと低木ばかり、高くても5〜6mだったようです。

——みんな燃料にしていたんですね。

渡部 滋賀県はどこでも、ガシガシ切って燃料にしています。ここのジオラマはそうした時代のようなすを再現しています。北比良の場合は、花崗岩地帯で、よい石材が採





プロフィール

わたなべ・けいいち / 1980年、愛媛県生まれ。2014年より滋賀県立琵琶湖博物館に勤務。専門は民俗学。

れたものですから、山の石が運び出され、地肌が露出していた部分もありました。上流から流れてきた砂が下流にどんどんたまって困るとか、いわゆる天井川が形成されるといった問題が発生しています。

ジオラマをつくるための聞き取りは、勉強になりましたね。

——つづいて③「水辺」ゾーンです。

渡部 「水辺」は、陸地と湖の間、ヨシが生えた湿地帯などを意味しています。人間が森の次に進出してきた場所で、水が増えたり減ったり、川に近いと洪水も起こったり、危険な環境でもありました。

中世・近世の時代になると、人間は水辺にどんどん手を加えていきます。田んぼやヨシ地、水路も造成します。典型的なのが内湖の周辺で、近江八幡市にあった津田内湖の周りで、近江八幡市にあった津田内湖の周りで暮らしを再現したジオラマは、やはり大正時代生まれの男性への聞き取りと古文書をもとに、昭和戦前期ぐらいまでの暮らしを復元しています。水路が道、船はトラックにあたり、水辺の田んぼへ農業に行ったり、漁撈もしました。

人物模型はすべて、聞き取りをもとに何らかの動作をさせ、棒立ちにならないようにしています。調査でお年寄りから聞き取りはよくしてきましたが、魚を捕ったときそれをつかむのは右手でしたか、左手でしたか、船の上で立っていたのはどのあたり

そのため、江戸時代後半から明治にかけて、砂防工事が行われるようになります。大津市の田上山地などもハゲ山状態だったので、ヒメヤシヤブシ（俗称ハゲシバリ）という植物の苗を植えたんです。

でしたかなんてことまでは聞いたことがなかったですから、勉強になりましたね（笑）。上にミラーがあつて、ストレッチャーなどの低い位置からでも展示をご覧いただけます。

——ここから漁具の展示に入ります。

渡部 展示全体を通してですが、モノを並べるだけでなく、実物大の人影やジオラマ、イラストを用いて、どのように自然を利用していったのがわかるような展示を心がけました。自然のなかで仕事をする人の体の動きや姿勢といったもので、できるかぎりリアルに表現したいと考えました。

ここでは沖島の漁師さんがやっていた琵琶湖特有のエビタツベ漁を再現しています。一人が操縦している船の上で、もう一人が横んだタツベを放り込んでいくんです。長い延縄状につながった一つの仕掛けで、昔は100個ぐらい、いまは200個使うそうです。タツベが竹製からプラスチック製に変わりましたが、形はまったく同じです。

——つづいて、4「湖」ゾーンになります。

渡部 琵琶湖の水上交通の主役だった丸子船を、こちらの壁沿いに移動させています。手前には、丸子船を復元した松井造船（大津市本堅田）などから寄贈された道具を展示しています。先ほどの「水辺ゾーン」にあった漁具とこちらの大工道具は、あわせて「琵琶湖の漁撈用具及び船大工用具」として、2018年に国の登録有形民俗文化財になりました。

——最後に中央の⑤「里」ゾーンです。入口は勧請縄ですね。

渡部 集落の境界に立てられ、魔除けの役割がありました。藁でつくるのは、外氣と接する展示室では難しく、人工素材で再現しています。虫の温床になってしまうと、周りの文化財にも被害がおよぶ可能性があるのです。展示品の素材には配慮しています。滋賀県では中世に「惣村」と呼ばれる地域社会が発達しました。村のお堂を再現したジオラマで、みんなが共同で建てたお堂に集まって祈願しています。最近の研究では、中世の村が発達するにあたって、お堂という存在が不可欠だったといわれています。堂内の人物は表情も豊かに作り込んで、真剣な祈りのようすを再現してあります。

中世は、資源の管理などさまざまな面で、文字のレプリカが並びます。室町時代以来、江戸、明治になつても続き、自治会のルールを掲示した例を最後に置いています。

——こちらには映像が見られるコーナーもあります。

渡部 代表例として東近江市今堀町にある日吉神社の宮座の年間の行事を紹介しています。映像はびわ湖放送さんに1年間ほど取材をしてもらい、年間の流れがわかるように編集していただきました。

その右手では、勧請縄もそうですが、村の暮らしを守ることを願った民俗行事の代表的なものとして、日野町中山の芋競べ祭り、甲賀市多羅尾の虫送り、甲賀市の大鳥神社の花奪いを紹介しています。

芋競べ祭りの巨大な里芋は祭礼終了すぐに業者に引き取ってもらって型取りし、別の素材で再現したものです。ロープの部分は現物をご提供いただき、孟宗竹も本物を保存処置して着色しました。

琵琶湖博物館リニューアルについて

琵琶湖博物館と企業との

新しい関係が築けました。

高橋館長は、リニューアル計画にどういった関わりをされていたのでしょうか。

高橋 計画は館の中に新琵琶湖博物館創造室というグループが置かれ、行政の担当者や学芸員がいっしょになって進めていきました。副館長だった時期もふくめて、私はそれを承認していく立場でした。ですから、私はあまり苦労していませんが、当館の職員は、博物館を運営しながら、また研究をしながらのリニューアルでしたので、普段でも2倍、3倍働いているところを、さらに3倍、4倍働いてくれたと思っています。

リニューアルに関係して私がしたことのひとつは、企業の方々へご支援のお願いをすることです。今回の展示・交流空間のリニューアルは、県の予算だけでは私たちの計画した企画ができませんでした。そこで、企業の方々に私たちの思いを説明して、寄付をお願いしてきました。現在は260社以上からご支援を受けています。この活動を通じて、寄付だけでなく、当館と企業の方々の新しい関係が築けたことはありがたかった。

たです。それまで、市民や学校との関係は築かれていたのですが、社会を構成する一員である企業とどのように関係を築き、いっしょに活動をしていくのかはあまりわかっていませんでした。

具体的に？

高橋 いろいろありますが、例えば伊藤園さんは「お茶で琵琶湖を美しく。」というキャンペーンをやっていて、募集で集まった写真や俳句の作品展を当館で展示しました。同様に、県内に事業所や工場がある8社で作った生物多様性びわ湖ネットワークは、トンボの調査を行った結果を当館で展示し、来館者との交流もしました。コクヨ工業滋賀さんと「お魚ノート」をいっしょに開発しました。そのほか、屋外展示を活用しての企業主催の観察会、企業の敷地内での生物保全活動をいっしょに行うなどさまざまな連携をするようになりました。企業主催で働いている方々が団体でレクリエーションに来られるようなこともあります。こうしたたくさんの方々の企業から支援を受けたり、いっしょに活動するような博物館は、全国的にも稀だと思います。

——A展示室、B展示室のご担当者にお話を聞くと、ユニバーサルデザインの観点から追加された所が見受けられました。

高橋 ユニバーサルデザインは弱者のためにあるだけではなくて、結局みんなが便利なのです。ただ、

展示スペースには限りがあるので、長いスロープを付ければ高いところに登れる場合でも、それができずに階段だけになってしまいう場合もあります。すべてをうまくやるというのは難しいものです。

当館では、そのあたりを人で対応しようというところで、開館当初から展示交流員というスタッフがいます。困っている人がいたら展示交流員が、一人ひとりのご要望を聞きながら対応することが大切だと思っています。

——新型コロナウイルスの影響はいかがでしょうか。

高橋 開館時間の短縮や入場者の制限はやっています。リニューアルオープン後も、しばらくはこの状態が続くでしょう。この10月に予定していた国際シンポジウムも延期となりました。連携している世界の研究施設や博物館の研究者を招いて、地域の方々と共に古代湖のことや人と湖の関係などを話し合いたいと思っていたので残念です。

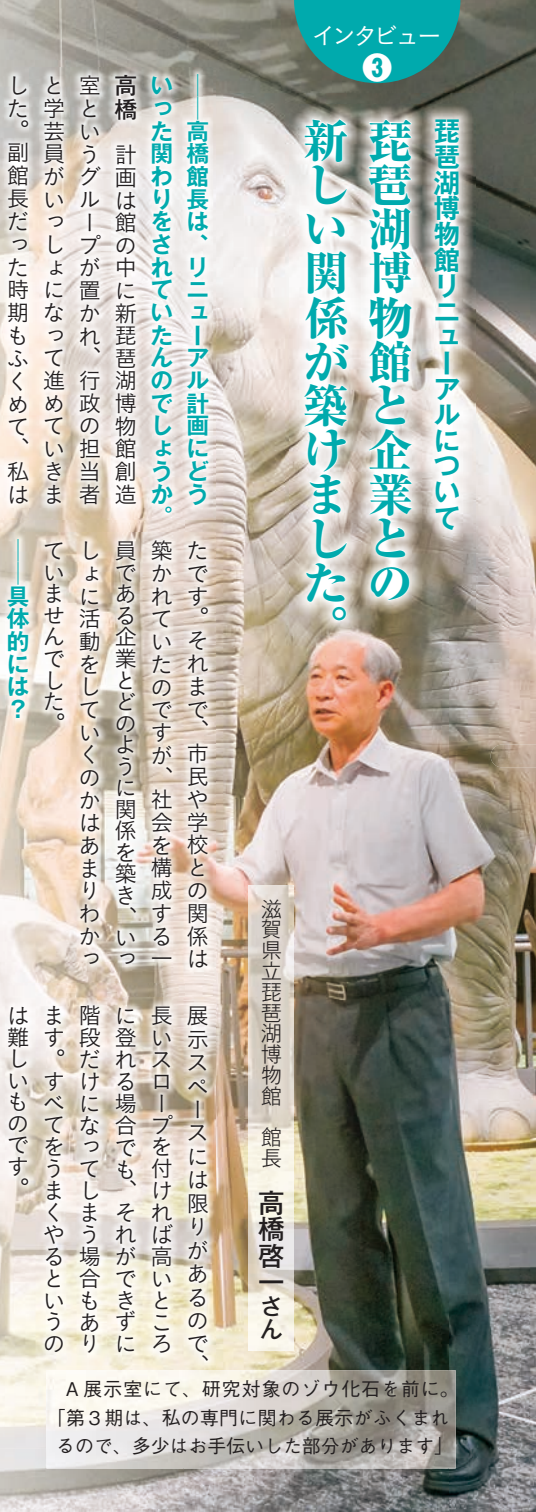
ただ、私はあまり悲観的ではありません。博物館の活動というのは、来館した子どもが親になった頃、さらに50年、100年と続けることで効果がでくるものなのです。1年や2年というのは、そういう意味では非常に短いブランクにすぎないと思っています。リニューアルした博物館は、これからも地域の方々と共に、調べ、学び、そして発信していきたいと思っています。(2020.9・10)

プロフィール

たかはし・けいいち／1957年、福岡県生まれ。1996年より滋賀県立琵琶湖博物館に勤務。副館長を経て、2019年より館長に就任。専門は古脊椎動物学。



A展示室にて、研究対象のゾウ化石の前に。「第3期は、私の専門に関わる展示がふくまれるので、多少はお手伝いした部分があります」



柴 しば

滋賀県立琵琶湖博物館

渡部圭一



リニューアルオープンした滋賀県立琵琶湖博物館の歴史展示室（B展示室）で、新たに展示される資料のひとつに「柴」があります。細い木の枝を丸く束ね、縄でしばっただけの簡単なつくりですが、過去の近江の人びとと自然環境との関わりをふりかえる上では、この柴の束は欠かせない存在です。

柴とは植物の名前ではなく、山からとる燃料の種類をさす言葉です。おもにツツジの仲間やコナラなどの広葉樹の枝を、カマやナタで刈ってつくります。「おいさんは山へシバリに……」という昔話の定

型句の正体のひとつが、こうした燃料用の柴であったことはあまり知られていません。

写真の柴は、近江八幡市南津田町にすむ大正12年（1923）生まれの古老、西川新五良さんの手で、展示用に復原制作されたものです。あえて復原としたのは、柴のような日用の燃料は作製から消費までのライフサイクルがあまりに早く、いわゆる「民具」として今日に残される機会がないからです。

津田内湖に面した南津田は、八幡山の西麓に広い共有山をもっていました。ところが聞き取りや古写真、また近世・近代の絵図や文書にさかのぼって調べると、この山には高い木はあまりなく、背丈ほどの高さの雑木が中心でした。柴をとる仕事は「シバシ」といい、秋の収穫の終わった人から山にいき、競って雑木を刈り取り、束を斜面の上から転がり落として運びました。

新五良さんからの聞き取りによれば、高度経済成長期より前の南津田のふだんの燃料は、稲の藁、アカマツの落ち葉、そしてこの柴であったといえます。炭や薪（割り木）は貴重品で、割り木を使うのは正月用に搗くもち米を蒸すときくらい、あとは人が亡くなったときには火葬をする燃料として、山のアカマツを1本伐ることができた程度でした。

「里山」の産物を代表する柴。そこには近江の森と人との関わりが凝縮されています。柴の形には地域ごとの違いもあり、その取り方や運び方もさまざまです。新装されたB展示室では、ジオラマや実物資料を駆使して、柴をめぐる人びとの営みを伝えていきます。

■関連講座

「宝物にみる聖衆来迎寺と元応国清寺」

11月12日(木) 午後3時～4時

講師：鯨井清隆(本館学芸員)

定員：50名(事前申込要) 参加費：500円

申込締切：10月29日(休)必着

お申し込み方法：ハガキ、FAX、Eメールのいずれかで、下記①②を記入して、お申込みください。

①希望講座名と日付

②参加希望者全員の郵便番号・住所・氏名・電話番号

住所：〒520-0037 大津市御陵町2番2号

FAX：077(521)2666

Eメール：info@rekihaku.otsu.shiga.jp

お問い合わせ先：TEL 077(521)2100

ミュージアム4館連携展示

信楽焼

—〈わび・さび〉の美の秘密とヒストリー—

地質と信楽焼

開催中～11月8日(日)

多賀町立博物館

昔の琵琶湖がつくった地層である古琵琶湖層群の土が信楽焼を生みだしました。この地層もまた元をたどれば周辺の岩石が風化し、堆積したものです。信楽焼の魅力を土の生い立ち、すなわち地質学の観点から紐解きます。

入館料：16歳以上250円

休館日：月曜日、10月18日(日)、10月29日(木)

■シャッフル・ギャラリートーク

10月10日(土) 午後1時30分～

解説者：永井晃子(考古学：甲賀市水口歴史民俗資料館) ※事前申込不要

お問い合わせ先：TEL 0749(48)2077

奇跡の土

—信楽焼をめぐる三つの景色—

開催中～12月13日(日)

滋賀県立陶芸の森 陶芸館

古琵琶湖層群に育まれた信楽の土がたっぷりだす焼締陶器は、趣ある土肌、緋色(スカーレット)や自然釉など独特の窯変の景色が魅力であり、海外の陶芸家たちにも刺激を与えてきました。



うずくまるはなれ
蹲 花入
室町時代(16世紀)
(滋賀県立陶芸の森陶芸館蔵)

テーマ展 地中からのメッセージ —発掘調査で紐解く—

10月10日(土)～11月29日(日)

野洲市歴史民俗博物館(銅鐸博物館)



野洲市内発掘調査風景

野洲市には、多くの埋蔵文化財が地中に眠っています。今回のテーマ展では、発掘調査を写真や実際に使用している道具を通して紹介し、野洲市内にて出土した、素晴らしい埋蔵文化財を紹介します。

入館料：大人200円、高大生150円、小中生100円
休館日：月曜日(祝日は開館)、11月4日(木)・24日(火)

※「関西文化の日」11月14・15日はすべての

入館者様無料

お問い合わせ先：TEL 077(587)4410

開館30周年記念企画展

聖衆来迎寺と盛安寺

—明智光秀ゆかりの下阪本の社寺—

10月10日(土)～11月23日(月・祝)

大津市歴史博物館

明智光秀が築いた坂本城周辺には、天台宗の古刹が点在しています。聖衆来迎寺は、国宝「六道絵」をはじめ、数々の寺宝を伝える寺として著名です。また、坂本の盛安寺も十一面観音立像が有名です。いずれも光秀とゆかりがあり、聖衆来迎寺には坂本城の城門が移築され、盛安寺は「明智寺」とも呼ばれていました。これらの寺々や坂本城周辺の社寺に伝わる宝物を紹介します。

入館料：一般800円、高大生400円、小中生200円

休館日：月曜日、11月4日(木)

重要文化財
(盛安寺蔵) 十一面観音立像

開館30周年記念展

滋賀県立琵琶湖文化館・栗東歴史民俗博物館地域連携企画展

栗太郡の神・仏 祈りのかがやき

開催中～11月15日(日)

栗東歴史民俗博物館

重要文化財
毘沙門天立像
西遊寺(草津市)

滋賀県立琵琶湖文化館と栗東歴史民俗博物館が、長年にわたる活動の中で、旧栗太郡域の寺社から寄託を受けてきた貴重な文化財・名品の数々を一堂に展示し、旧栗太郡に関わる幅広く、奥深い宗教文化を紹介します。

入館料：無料 休館日：月曜日、11月4日(木)

■ギャラリートーク

10月18日(日) 午後2時～

申込不要・無料

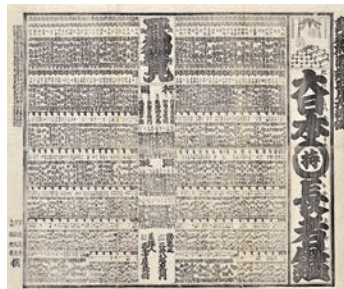
お問い合わせ先：TEL 077(554)2733

秋季企画展

長者番付から見る近江商人

開催中～11月29日(日)

東近江市近江商人博物館



「大日本持元長者鑑」万延2年(個人蔵)

「相撲番付」をはじめ、江戸時代末期から昭和初期までのさまざまな「見立番付」と、東近江地域の近江商人も多く登場する全国版の「長者番付」や当地域の「長者番付」を紹介します。

入館料：大人300円、小中学生150円

休館日：月曜日(9月21日、11月23日は開館)、
9月23日、11月4日、11月24日

お問い合わせ先：TEL 0748(48)7101



気づき力

「あれ-?変」と感じたら、考えそして改善へ

田中 進 著

B6判並製本 総150頁 頒価1140円

問合先 彦根市大藪町225-93 (著者)

業務品質を高める活動は、些細な変化に気づくことから。国際標準化機構(ISO)の審査業務に携わってきた著者が、その経験から得たヒントを紹介。(2020. 8.16刊)

大沢四方山話 彦根市・平田町大沢の歴史散策

北川司郎 編著

A4判並製本 総76頁 非売品

問合先 彦根市平田町531 (著者)

昭和40年代から、数軒しかなかった農村が1000世帯が密集する街へと変貌した彦根市平田町大沢地区。井伊家の鷹狩場だった話、初代県水産試験場の話などを収録。(2020. 9刊)



近江の夏まつり 江州音頭

ようの 丁野永正 著

B6判並製本 総178頁 頒価1000円

問合先 東近江市建部瓦屋寺町134-25 (著者)

今年2月の「東近江江州音頭普及愛好会」発足、8月の「東近江江州音頭会館」オープンにも関わった著者が、江州音頭の歴史と歌詞、踊り方をまとめた自著『滋賀の盆踊り 江州音頭』を改訂。(2020. 8.30刊)

実証・経営原論「継ぐ・つなぐ」 The Principle Of Real Management

原 清 著

B6判並製本 総278頁 頒価2600円+税

問合先 彦根市城町1-3-35 (エデュース・はら事務所)
大阪と京都で18年ずつ経営コンサルタントを営んできた著者が、体験した経営の失敗事例を紹介しながら、中小企業が生き残るためのポイントを説く。(2020. 9.30刊)

The Principle Of
Real Management

実証・経営原論
「継ぐ・つなぐ」

主催：ブックインとっとり実行委員会 第33回地方出版文化功労賞受賞！

吉田与志也著『信仰と建築の冒険
—ヴォーリスと共鳴者たちの軌跡—』

昨年11月に倉吉市立図書館(鳥取県)で開かれた「ブックインとっとり2019」に出品展示された全国の地方出版物(鳥取県と東京23区の出版社を除く、約300点)の中から鳥取県民によって選ばれた12点を対象に、今年の7月11日(土)、最終審査会が行われ、サンライズ出版発行の吉田与志也著『信仰と建築の冒険』が最高賞にあたる功労賞を受賞しました。

11月1日(日)には米子市立図書館において、受賞者の吉田氏(守山市在住)とZOOMでつないだ表彰式・受賞記念講演会が開催されます。

ご視聴には事前登録が必要です。詳細はブックインとっとりHPをご覧ください。

お問合せ先

ブックインとっとり実行委員会事務局
TEL 0859 (31) 5001



好評
発売中

甲賀の茶と信楽焼のヒストリー —茶壺から汽車土瓶まで—

室町時代以来、信楽焼はお茶と関わり合いながら生産が続いてきました。水口会場では茶壺を代表とする大物と煎茶器を成形する小物の技術を中心に、土山会場ではお茶に関わる信楽焼と製茶工程を紹介します。

【水口会場】開催中～12月16日(水)

甲賀市水口歴史民俗資料館

入館料：大人150円 小・中学生80円

休館日：木・金曜日

お問い合わせ先：TEL 0748 (62) 7141

【土山会場】10月10日(土)～12月6日(日)

甲賀市土山歴史民俗資料館

入館料：無料 休館日：月・火曜日

■シャッフル・ギャラリートーク

11月14日(土) 午後1時30分～

解説者：大槻倫子(陶磁史：愛知県陶磁美術館／元・滋賀県立陶芸の森)

会場：甲賀市土山歴史民俗資料館

※事前申込不要

お問い合わせ先：TEL 0748 (66) 1056

開設30周年を記念する本展では、「日本六古窯と信楽焼の景色」「信楽焼とアメリカ陶芸」「信楽・焼締めの今」という三つの視点から、その魅力を見つめ直します。

入館料：一般700円、高大生520円、中学生以下無料
休館日：月曜日

■シャッフル・ギャラリートーク

11月22日(日) 午後1時30分～

解説者：糸本夏実(地質学：多賀町立博物館)

※事前申込不要

■ワークショップ

「薪窯ワークショップ 制作&参加者制作」
10月23日(金)

講師：澤清嗣氏(陶芸家)

会場：滋賀県立陶芸の森 信楽産業展示館ホール

■「薪窯の魅力を語る会」

【ライブ配信】10月24日(土)

【録画鑑賞会】10月25日(日)

ともに午前9時45分～午後3時45分

会場：滋賀県立陶芸の森 信楽産業展示館ホール

※参加には事前申し込みが必要です。

お問い合わせ先：TEL 0748 (83) 0909



びわ湖の森の生き物 7 トチノキは残った —山里の恵みの自然史と暮らし—

青木 繁 著

四六判並製本 総200頁 1800円＋税

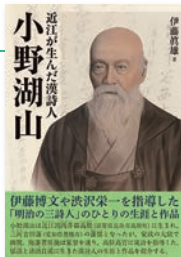
奥山のトチノキの巨木伐採をきっかけに調査と保全活動に取り組んできた著者が、大量の実をつけるその生態、トチノキ林や巨木の分布と現状、栃餅づくりの知恵や材の利用などを紹介。

近江が生んだ漢詩人 小野湖山

伊藤眞雄 著

A5判並製本 総288頁 2000円＋税

「明治の三詩人」に数えられる小野湖山は、近江国浅井郡高畑に生まれ、三河吉田藩（愛知県豊橋市）の藩儒となるが、安政の大獄で幽閉。明治維新後は家督を譲り、伊藤博文や渋沢栄一ら高位高官や実業家に漢詩を指導した。



蒲生氏郷が攻めた城・築いた城 近江日野が生んだ名将

福永 保 著

B6判並製本 総216頁 2300円＋税

戦国武将・蒲生氏郷が生誕から人質時代を過ごした城、信長・秀吉に仕えて攻撃した城、奥州の一揆を制圧した城、築城した城、蒲生氏の会津領主時代の遺構が残る城まで49城を紹介。

畦道さんぽ 野の草花 水彩画集

中川善雄 画

B5変形並製本 総66頁 1800円＋税

静かな里に咲く草花などを、見たまま、感じたまま描いた水彩画61点を収録。わかりやすい解説と、ゆかりの俳句を添えられ、それぞれの特徴や可憐さ、逞しさが伝わる一冊。



表紙写真 滋賀県立琵琶湖博物館 A 展示室の古代ゾウの半身半骨標本

編集後記 取材は、グランドオープンのちょうど1か月前。高橋館長に「まだまだ作業中ですね」と言うと、「こういうものなんです。オープンした日もできていないんですよ。企画展示もそうですが、だいたいしか完成していません。始まってから、自分で『あっ、間違ってた』と気づいたり、来館者から指摘を受けて、1年ぐらいはずっと直していきます」とのこと。 ㊥

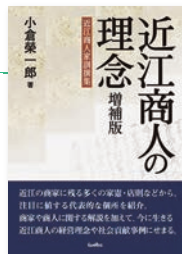


近江商人の理念 増補版 近江商人家訓撰集

小倉榮一郎 著

A5判並製本 総160頁 1800円＋税

「三方よし」という言葉を定義づけたとされる著者が、商家に遺る家訓や店則を紹介したロングセラーの増補版。新たな研究成果を基に各商家の経営や時代背景を解説。



戦後日本流通業のイノベーター —ファミリービジネスの業種転換事例—

上野善久 著

四六判並製本 総198頁 2400円＋税

湖北の酒蔵「布屋」の跡取り、上野久一郎は、地方の地酒の東京での販売に目をつけ、戦後復興期における山手線沿線の飲食業・流通業に革新をもたらした。“知られざる近江商人”の足跡。

びわ湖の畔のニホンミツバチ マキノの里でともに暮らす日々

尼川タイサク 著

A5判並製本 総216頁 2000円＋税

琵琶湖の西北マキノの里に暮らす昆虫学者（神経生物学）のタイサク先生が、愛するニホンミツバチとの共同生活(?)を写真や自筆イラストを交えながら紹介。



Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1

サンライズ出版株式会社 Duet 編集部

TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先